

新歴史加え博物館刷新へ

■筆者プロフィル■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。



展示内容を一新して生まれ変わる予定の但馬牛博物館内=新温泉町丹土

お客さんからすれば、いつも同じで、興味が薄れてしまうだろう。それより大きな問題は、但馬牛は進化し、

20余年、スーパーイースト種雄牛「谷福土井」の剥製を作り、説明ビデオを作り直したりしたが、展示内容は開館当時ままで。

花が咲き、子どもたちが入学や進級し、希望に胸を膨らませる季節になった。還暦を過ぎたおじさんだが、実は私も胸を膨らませている。それとも、今年、但馬牛博物館をリニューアルすることになったからだ。

但馬牛博物館は、但馬牛の歴史や特徴などを来園された人に知つてもうおうと、1994年、牧場公園のオープンと同時に開館した。それから

例え、但馬牛は黒毛和種の育種資源とか、全国の有名ブランド牛肉の素牛と言われてきた。昭和期、但馬牛の子牛の6割以上が全国の肉牛生産に貢献され、開館当時も県外に売られる子牛と、県内に

とどまる子牛が半々くらいだった。ところが今、但馬牛の子牛は8割以上県内にとどまっている。

産地が減った。そして、県外の血統を玄孫ない但馬牛の閉鎖育種を見直すべきではないかという議論も巻き起こった。

そんな時、この但馬牛最大のピンチを救う種雄牛ができる。そして但馬牛生産農家や技術者が協力して、コンスタントに能力の高い種雄牛がで



★22★

新たな歴史を刻んでいるのに、展示は20年前のままで現状を反映していない部分ができるだけだ。

新たな歴史を加え、但馬牛の今を的確に伝えられる博物館にするのが、リニューアルの狙いだ。

肉や但馬肉が地域団体商標に登録され、兵庫県で生まれた但馬牛を兵庫県で育て、兵庫県でと畜したものだけが神戸市でと畜したものだけが神戸

きるようになった。また、但馬牛の一番のウリであるおいしさ成分の研究成果が出で改良に活用始めた。

さらに、2007年に神戸黒毛和種で但馬牛を祖先に持たない牛はまずいないのに、県外に出る子牛が減ると、但馬牛は他県の黒毛和種と最も血縁が遠い、特異的な存在になつた。

そして、12年から輸出が始まり、米国やEUなどでも商標登録され、15年には地理的表示保護制度に登録されるなど、国際ブランドに成長した。

去年から、人と自然の博物館、神戸大学をはじめ但馬牛の団体や美方郡2町の協力を得て、どんな展示にするか検討している。

一般の人に但馬牛を理解してもらい、但馬牛生産農家にも参考になる情報を発信できる。そんな博物館にしようとする。ワクワクしながら頭をひねる今日この頃だ。